

一階双曲系の near-field 差分解,
または人工境界法

甲南大 理 田口友康

1. まえかきと結果 \mathbb{R}_x^n における線形双曲系の初期値問題

$$(1) \begin{cases} \frac{\partial u}{\partial t} = \sum_{i=1}^m A_i(x) \frac{\partial u}{\partial x_i} + f(x), & u = u(t, x) \text{ は } m\text{-A'クトIV} \\ u(0) = u_0(x) \end{cases}$$

に対して, 有限個のメッシュ点を用いて解 $u(t, x)$ を近似するスキームを提案する。方法は \mathbb{R}_x^n を n 次元立方体 $\Omega \subset \mathbb{R}_y^n$ に1対1に写す座標変換 $G: y = Gx$ によって (1) を Ω 上の方程式にかきかえたものに fractional-stepwise の差分法を適用するのが要旨である。

Ω 上で得られるこの差分解を $U_h(t, y)$ とし, $y \in x \in \mathbb{R}_x^n$ にかき直したものを $U_h(t, x)$ と記すとき, (1) に対する適当な仮定と, 後に示す安定条件の下で誤差評価

$$(2) \max_{t \in [0, T]} \left[\int_{\mathbb{R}_x^n} \dots \int \Phi(x) |U_h(t, x) - u(t, x)|^2 dx \right]^{\frac{1}{2}} \leq C_{T, \Phi} h^s$$

がなりたつ。ここで s は差分の accuracy の次数, $\Phi(x)$ は

$$\Phi(x) = \prod_{i=1}^n \phi(x_i), \quad \phi(x_i) = \begin{cases} 1, & \text{原点の近傍} \\ O(|x_i|^{-\frac{(2s+1)s}{8-1}}), & |x_i| \rightarrow \infty \end{cases}$$

の重み関数である。ただし q は $G \in$ 定義するパラメータで $q \geq 3$ とする。

(2) から直ちに

$$(2') \quad \max_{t \in [0, T]} \left[\int_D \cdots \int_D |u_a(t, x) - u(t, x)|^2 dx \right]^{\frac{1}{2}} \leq C_{T, D} h^s,$$

$D \subset \mathbb{R}_x^n$ は任意の有界領域

すなわち L^2_{loc} 収束が導かれる。

さて G として原点の近傍が等長変換による変換 E により (応用上 h が自然), その領域を D_0 とする。ここで $\Omega \in \mathbb{R}_x^n$ の n 次元立方体とみなそう。そして $u_a(t, x)$, $x \in \Omega \subset \mathbb{R}_x^n$, 自身を (1) の Ω における“数値解”とみなすと, (2') により $u_a(t, x)$ は D_0 上で $u(t, x)$ に L^2 収束する近似解である。このことから, われわれの方法は (1) に対して $\partial\Omega$ を“人工境界”とし, D_0 上の L^2 収束を保証する近似解法とみなすことができる。Lax-Wendroff 系スキームを用いた数値実験によると, 原点近傍に“振動源”をもつ問題に対して D_0 上では数値的再現性が良好である。また $\partial\Omega$ に近い領域では outgoing wave が吸収されていく様子が

観察される ([6]).

以下の議論のために次の仮定を置く。

(i) $A_i(x)$, $i=1, \dots, n$, は $m \times m$ 行列で, 有界で滑らかな, かつ遠方で定数行列 $A_{i\infty}$ となる。そして (1) は *regularly hyperbolic* とする。

(ii) $f = f(x)$ と $u_0 = u_0(x)$ は有界で滑らかな m ベクトルで, 無限遠でゼロになる。

(iii) 解 $u(t, x)$ は L^2 に属し, 収束の評価のためにさしあたり, t, x それぞれにつき $S+1$ 階まで一様に有界な導関数 ϵ もつ。

2. 座標変換

\mathbb{R}_x^n の n 次元立方体 $\Omega = \overbrace{\omega \times \dots \times \omega}^n$ ($\omega = (-1, 1) \in \mathbb{R}^1$) と考え, $G: \mathbb{R}_x^n \rightarrow \Omega$ なる写像として

$$y = Gx$$

$$x_i = \int_0^{y_i} \frac{dy_i}{a(y_i)}, \quad y_i \in \omega$$

$$a(\eta) \in C_0^p(\bar{\omega}), \quad p = \max(4, n+2)$$

$$0 < a(\eta) \leq 1, \quad \eta \in \omega$$

$$a(\eta) \sim (1 - |\eta|)^\delta, \quad \delta \geq 3.$$

(記号 \sim は $\eta = \pm 1$ の近傍で, 定数倍 ϵ のとき左辺が右辺に一致する ϵ と ϵ あり得るものとする。)

あるものとする。 $B_i(y) \equiv A_i(G^{-1}y)$, $g(y) \equiv f(G^{-1}y)$

$v_0(x) \equiv u_0(G^{-1}y)$, $v(t, x) \equiv u(t, G^{-1}y)$ とおけば (1)より

$$(3) \quad \begin{cases} \frac{\partial v}{\partial t} = \sum_{i=1}^n a_i B_i \frac{\partial v}{\partial y_i} + g \\ v(0) = v_0 \end{cases} \quad a_i = a(y_i)$$

が導かれる。以下 (3) の差分をとりあつかう。

3. 差分近似

$\bar{\omega} = [-1, 1] \in \mathbb{Z}N\hbar$ 等分した長さ \hbar とし, $\bar{\Omega}$ に \times シュ中 \hbar の一様な差分格子系 $y(\mu)$ とする。 $y(\mu)$ は

$$y(\mu) = \hbar \sum_{i=1}^n \mu_i e_i \quad \begin{matrix} i \text{ 成分} \\ \mu_i \in \{0, \pm 1, \pm 2, \dots, \pm N\hbar\}, e_i = (\underbrace{0, 0, \dots, 0}_{i-1}, 1, 0, \dots, 0) \\ \mu \equiv (\mu_1, \dots, \mu_n) : \text{multi-index} \end{matrix}$$

である。また時間の区間 $[0, T]$ に \times シュ中 $k = \lambda\hbar$ (λ は正のパラメータ) の格子系 $t_\nu = \nu k$, ($\nu = 0, 1, \dots$) とする。以下 $v_\nu(\mu)$ を省略して, 格子系 $(t_\nu, y(\mu))$ を (t, y) のように記す。また引数の記法として, 格子系 (t, y) の i の displacement がある変数のみを明示する: $t = 1$ とす:

$$(例) \quad \begin{cases} v(t, y_1, \dots, y_{i-1}, y_i + \hbar, y_{i+1}, \dots, y_n) = v(y_i + \hbar) \\ v(t + k, y_1, \dots, y_n) = v(t + k) \end{cases} \quad \begin{matrix} t \text{ 成分} \\ \text{とす} \end{matrix}$$

(差分スキーム) 次の形のもの考察する.

$$(4) \left\{ \begin{array}{l} U_n(t+k) = \mathcal{L}_h U_n(t) + k d_n(t), \quad y_{(\mu)} \in \Omega \\ \text{境界条件} \\ U_n(t) = 0, \quad y_{(\mu)} \in \partial\Omega \\ \text{初期条件} \\ U_n(0) = U_0, \quad y_{(\mu)} \in \bar{\Omega}. \end{array} \right.$$

∴

$$\mathcal{L}_h = \sum_{(i_1, \dots, i_n) \in P} \alpha_{i_1, \dots, i_n} L_{i_1, h} \cdots L_{i_n, h}$$

$$0 \leq \alpha_{i_1, \dots, i_n} \leq 1, \quad \sum_{(i_1, \dots, i_n) \in P} \alpha_{i_1, \dots, i_n} = 1$$

P は $(1, \dots, n)$ の置換の集合.

$L_{i, h}$ は $\frac{\partial U}{\partial t} = a_i B_i \frac{\partial U}{\partial y_i}$ を近似する one-step の差分近似作用素.

$L_{i, h}$ は具体的に

Scheme I (Friedrichs-Lax 型; \bar{U}_n を修正したもの.)

$$\left[\begin{array}{l} L_{i, h} U_n = \bar{U}_n + \frac{\lambda}{2} a_i B_i \{ U_n(y_i + \tau) - U_n(y_i - \tau) \} \\ \text{ただし } \bar{U}_n = (1 - a_i) U_n + \frac{a_i}{2} \{ U_n(y_i + \tau) + U_n(y_i - \tau) \} \\ d_n = q \\ \alpha_{i_1, \dots, i_n} = \frac{1}{n!}, \quad (i_1, \dots, i_n) \in P. \end{array} \right.$$

Scheme II

$$\left[\begin{array}{l} L_{i,h} v_R = \text{modified Lax-Wendroff (one-dimensional)} \\ d_R = \frac{1}{2} (g + g(t+h)) + \frac{\lambda}{4} \sum_{i=1}^n a_i B_i \{ g(y_i+h) - g(y_i-h) \} \\ d_{i_1 \dots i_n} = \frac{1}{n!}, (i_1, \dots, i_n) \in P. \end{array} \right.$$

を考へる。

4. 安定条件と収束

擬差分作用素の理論 (Yamaguti-Nogi [1], Schintani-Tomoeda [3] 等) に応用する。まず $y \in \Omega$ で定義されている諸関数 \hat{B}_i は $y \in \mathbb{R}_y^n$ 上の関数になるよう定義域を拡張する:

$$\left[\begin{array}{l} \hat{B}_i(y) \equiv \left\{ \begin{array}{ll} B_i(y), & y \in \Omega \\ A_{i,\infty}, & y \in \mathbb{R}_y^n - \Omega \end{array} \right. \\ \hat{g}_i(y) \equiv \left\{ \begin{array}{ll} g(y), & y \in \Omega \\ 0, & y \in \mathbb{R}_y^n - \Omega \end{array} \right. \\ \hat{v}_0(y) \equiv \left\{ \begin{array}{ll} \hat{v}_0(y), & y \in \Omega \\ 0, & y \in \mathbb{R}_y^n - \Omega \end{array} \right. \end{array} \right.$$

$$\hat{a}(\eta) = \begin{cases} a(\eta), & \eta \in \omega \\ 0 & \eta \in \mathbb{R}^1 - \omega \end{cases}$$

$$\hat{a}_i(y) = \hat{a}(y_i) \times \hat{\sigma}(y')$$

$$\forall i \in I \quad y_i \in \omega, \quad y' = (y_1, \dots, y_{i-1}, y_{i+1}, \dots, y_n) \in \mathbb{R}_y^{n-1}$$

$\hat{\sigma}(y') \in C^\infty(\mathbb{R}_y^{n-1})$ は support compact である

$$\begin{cases} \text{supp } \hat{\sigma}(y') \supseteq (\bar{\omega})^{n-1}, \\ 0 \leq \hat{\sigma}(y') \leq 1, \\ \hat{\sigma}(y') = 1 \text{ for } y' \in (\bar{\omega})^{n-1} \end{cases}$$

なるもの。

以下、記号 \wedge を省略する。そして (3), (4) を \mathbb{R}_y^n 上の方程式とみなす。すると (3) の解 $v(t, y)$, (4) の解 $v_a(t, y)$ につき

$$v(t, y) \in L^2(\mathbb{R}_y^n); \quad v(t, y) = 0, \quad y \in \mathbb{R}_y^n - \Omega$$

$$v_a(t, y) \in L^2(\mathbb{R}_y^n); \quad v_a(t, y) = 0, \quad y \in \mathbb{R}_y^n - \Omega$$

とすることには注意しよう。

定理1 (安定性). Scheme I は $\lambda \leq \min_{1 \leq i \leq n} \frac{1}{\sup_{x \in K_x^n} \rho(A_i)}$ であるとき安定である。

Scheme II は $\lambda \leq \min_{1 \leq i \leq n} \frac{2}{\sup_{x \in K_x^n} \rho(A_i)}$ であるとき安定である。ここで $\rho(A_i)$

は A_i のスペクトル半径である。

(証明) $\|L_{i,h} v_h\| \leq (1 + O(h)) \|v_h\|$ とする条件がある:
 と示せばよい。ところが擬差分作用素を用いる通常のやりかたとして次に定義されるような L^2 等価なノルム III・III で議論してよい:

$$\text{III} \cup \text{III} = \sum_j \text{Re}(G_{i,h} d_j v, d_j v)$$

$\{d_j^2\}$ は適当な 1 の単位分割。

$G_{i,h}$ は B_i の対角化行列 n_i から定義される正定値行列 $g_i = n_i^* n_i$ に付随する one-parameter family。

III・III を用いて, 定理の条件が

$$\text{III} v_h \text{III} - \text{III} L_{i,h} v_h \text{III} \geq -O(h) \text{III} v_h \text{III}$$

とある λ がある: と示す。Shintani-Tomoda [3] の定理 3.4 を適用しよ。 $L_{i,h}$ の symbol は l_i とし

$$p_i = g_i - l_i^* g_i l_i$$

が非負定値とある条件を示す。

Scheme I に対しては

$$l_i(y, \omega) = 1 - a_i(y)(1 - \cos \omega_i) + i\lambda a_i B_i \sin \omega_i,$$

よって

$$p_i = n_i^* \{ 2a_i(1 - \cos \omega_i)(1 - a_i) + a_i^2 \sin^2 \omega_i (1 - \lambda^2 d_i^* d_i) \} n_i$$

$$d_i = n_i^{-1} d_i n_i = B_i.$$

したがって定理にのべた条件で p_i は非負定値とある。

Scheme II に対しては

$$l(y, \omega) = 1 + i\lambda \sum a_i B_i \cos \omega_i \sin \omega_i - \frac{\lambda^2}{2} \sum a_i^2 B_i^2 \sin^2 \omega_i,$$

よ、て

$$p_i = m_i^* (\lambda a_i B_i)^2 \left\{ 1 - \frac{\lambda^2}{4} (a_i B_i)^2 \right\} \sin^2 \omega_i.$$

したが、て定理に α へて条件 α p_i は非負定値となる。

証明終り。

定理 2 (収束性). Scheme I または Scheme II の解 $v_n(t, y)$

は R^n の定したものが $u_n(t, x)$ とかく。すなわち

$$u_n(t, x) \equiv v_n(t, Gx). \quad \text{そのとき,}$$

$S+1$ 階まで連続の近似には有界な偏導関数をもつ解 $u(t, x)$

に対して (2) 式の誤差評価が成り立つ。

(証明) $\psi(\eta) \in C_0^1(\bar{\omega})$ と

$$\begin{cases} 0 < \psi(\eta) \leq 1 & \eta \in \omega \\ \psi(\eta) \sim (1 - |\eta|)^n, & n \geq 1 \end{cases}$$

α ように選 ω , $\psi \in$

$$\hat{\psi}(\eta) = \begin{cases} \psi(\eta), & \eta \in \omega \\ 0, & \eta \in R^1 - \omega \end{cases}$$

によ、て R^1 に拡張する。

重み関数として

$$\Psi(y) = \prod_{i=1}^n \hat{\psi}(y_i)$$

と取る。以下、記号 \wedge を省略する。

$$\begin{cases} w_n \equiv \Psi(y) v_n, & v_n \text{ は (4) の解} \\ w \equiv \Psi(y) v, & v \text{ は (3) の解} \end{cases}$$

とおき、 w_n のみたす式を導く。(4) の両辺に Ψ を乗じると

$$w_n(t+k) = \Psi \mathcal{L}_n v_n + k \Psi d_n$$

と取る。このとき、Scheme I, II によって

$$(5) \quad \begin{cases} \Psi \mathcal{L}_n v_n \\ = \mathcal{L}_n w_n + k \mathcal{M}_n w_n + k E_n v_n \\ \|\mathcal{M}_n w_n\| \leq O(1) \|w_n\| \\ \|E_n v_n\| \leq O(h^{\delta+\nu-1}) \|v_n\| \end{cases}$$

がなりたつ。(証明は後述) また w によって

$$v(t+k) - \mathcal{L}_n v - q = k h^{\delta} r$$

(右辺は truncation term) がなりたつから、

$$w_n - w \text{ は } E_n \text{ とおいて}$$

$$\begin{aligned} e_n(t+k) &= \mathcal{L}_n e_n + k \mathcal{M}_n e_n + k E_n (v_n - v) \\ &\quad - k h^{\delta} r. \end{aligned}$$

が $\frac{\delta}{\nu}$ より小さい。よって

$$(6) \quad \|e_n(t+k)\| \leq (1+O(k))\|e_n\| + kO(k^{q+r-1})\|v_n-v\| \\ + k h^q \sup |\Psi r|^q |\Omega|.$$

$D_t^\sigma u, D_x^\sigma u$ ($0 \leq \sigma \leq s+1$) が一様に有界であるとき, Ψr は

$$\begin{cases} r \geq q, & \text{Scheme I } (s=1) \\ r \geq 2q, & \text{Scheme II } (s=2) \end{cases}$$

が一様に有界となる。以下を述べよう。

$$\begin{aligned} \Psi r &\sim a_i \psi_i \frac{\partial^{s+1} v}{\partial y_i^{s+1}} \\ &= a_i \psi_i \left(\frac{1}{a_i} \frac{\partial}{\partial x_i} \right)^{s+1} u \\ &= \frac{\psi_i}{(a_i)^s} \frac{\partial^{s+1} u}{\partial x_i^{s+1}} + \dots \end{aligned}$$

したがって,

$$\begin{aligned} \frac{\psi_i}{(a_i)^s} &\sim (|x|+c)^{-\frac{\lambda}{q-1}} (|x|+c)^{-\frac{sq}{q-1}} \\ &= (|x|+c)^{-\frac{r-sq}{q-1}} \end{aligned}$$

かなり分かる。 $\|v_n-v\|$ の L^2 有界性から分かるように,

(6) に離散 Gronwall lemma を適用すれば, $q+r-1 \geq s$

と仮定して, $\|e_n(t)\| = O(h^q)$ の仮定が得られる。

(7) $e_n(t, y) \in \mathcal{X} \subset R_x^n$ と仮定する。

$$\|e_n(t)\|^2 = \int_{R_y^n} \dots \int |\Psi(v_n-v)|^2 dy$$

$$= \int_{\Omega} \dots \int |\psi(u_n - v)|^2 dy = \int_{R_x^+} \dots \int \Phi |u_n - u|^2 dx$$

7.7.5.6

$$\begin{aligned} \Phi(x) &\equiv \left[(\Psi(y))^2 \prod_{i=1}^n a(y_i) \right]_{y=Gx} \\ &= \prod_{i=1}^n \phi(x_i) \end{aligned}$$

$$\begin{aligned} \phi(x_i) &= \psi(y_i)^2 a(y_i) \Big|_{y_i=(Gx)_i} \\ &\sim (|x|+c)^{-\frac{2\lambda+\beta}{\beta-1}} \end{aligned}$$

$\therefore \lambda = 5\beta$ とおくと

$$\phi(x_i) = O(|x_i|^{-\frac{(25+1)\beta}{\beta-1}}), \text{ as } |x_i| \rightarrow \infty$$

とす。

(5) の証明. Scheme I の場合のみ述べる。

(7) $\psi_i, L_{i,h}, v_h$

$$= L_{i,h}(\psi_i v_h) + h M_{i,h}(\psi_i v_h) + h E_{i,h} v_h$$

$$\begin{aligned} M_{i,h}(\psi_i v_h) &= \alpha_a^+(y_i) \left\{ \frac{1}{\lambda} + B_i(y) \right\} [\psi_i v_h](y_i+h) \\ &\quad + \alpha_a^-(y_i) \left\{ \frac{1}{\lambda} - B_i(y) \right\} [\psi_i v_h](y_i-h) \end{aligned}$$

$$\begin{aligned} E_{i,h} v_h &= \varepsilon_a^+(y_i) \left\{ \frac{1}{\lambda} + B_i(y) \right\} v_h(y_i+h) \\ &\quad + \varepsilon_a^-(y_i) \left\{ \frac{1}{\lambda} - B_i(y) \right\} v_h(y_i-h) \end{aligned}$$

(文献)

1. M. Yamaguti and T. Nogi, An algebra of pseudo difference schemes and its application, Publ. RIMS, Kyoto Univ., Ser. A, 3 (1967), 151 - 166.
2. R. Vaillancourt, A strong form of Yamaguti and Nogi's stability theorems for Friedrichs' scheme, Publ. RIMS, Kyoto Univ., 5 (1969), 113 - 117.
3. H. Shintani and K. Tomoeda, Stability of difference schemes for nonsymmetric linear hyperbolic systems with variable coefficients, Hiroshima Math. J., 7 (1977), 309 - 378.
4. M. Yamaguti, Le problème de Cauchy et les opérateurs d'intégrale singulière, Mem. Coll. Sci., Kyoto Univ., Ser A, 32 (1959), 121 - 151.
5. T. Taguti, Finite difference schemes in the near field of linear hyperbolic systems, in preparation.
6. ———, Numerical solution to the elastodynamic equation in the half plane, in preparation.